

形容詞終止形一段活用の発生要因 — 九州方言を中心として —

Factors in the Occurrence of the Single Tier Declension of Adjectives:

With Special Reference to the Kyushu Dialect

早野 慎吾

HAYANO Shingo

Abstract

The eastern Kyushu dialects are regions with the "i" word endings. A phenomenon called "non-declension" (Itoi 1969) can be observed mainly in Miyazaki Prefecture, which is an "i" word ending region. This is the single tier declension of adjectives as the stem. For example, *TAKAI* is conjugated as *TAKE* (end-form), *TAKE-KAQTA* (past tense-form), *TAKE-NE* (negative-form), *TAKE-NARU* (conjunctive-form), and *TAKE-KERYA* (subjunctive-form). This phenomenon can also be observed in the Tohoku region and southeastern Kyushu (especially southern Miyazaki and eastern Kagoshima prefectures), where the distribution is ABA. The Tohoku and southeastern Kyushu regions share the same /syllabeme dialect/ and /"i" word endings/. As a result of analyzing the mechanism of the single tier declension of adjectives based on previous studies and a survey conducted in Miyazaki City, it was found that the main cause of the phenomenon was that the distinction between word and stem became ambiguous due to contraction of the "i" word endings.

Keywords : the single tier declension of adjectives, shortening of a word ending, "i" word endings, ABA distribution

1. はじめに

九州西部方言の特徴的な現象として、タカカ (高い)・ウマカ (上手い) などのカ語尾形容詞がある。室町時代の日本語を知るための貴重なキリシタン資料であるロドリゲス『日本大文典』(1608)には肥前・肥後・筑後の特徴として語尾の I (イ) が、Ca (カ) に変わることが記載されている (土井1955)¹⁾。九州東部方言はイ語尾地域であるが、そのイ語尾地域である宮崎県を中心に「無活用化」(糸井1969)²⁾、「単語中心活用化」(日野1986)³⁾と呼ばれる現象が観察できる。これは形容詞の終止形を語幹として活用するものである。例えば「高い」は、take (高い)・take-kaQta (高かった)・take-ne (高くない)・take-naru (高くなる)、take-kerya (高ければ) のようになる。このような活用を本研究

では形容詞の終止形一段活用と表現することにする。この現象は特に東北地方と九州南東部（特に宮崎県中・南部および鹿児島県東部）で観察でき、ABA分布をなしている。本稿では形容詞の終止形一段活用のメカニズムについて、国立国語研究所編（1994）⁴⁾、九州方言学会（1969）⁵⁾などの先行研究および宮崎県宮崎市で筆者らが行った実地調査から総合的に分析する。

2. 術語について

糸井（1969）では大分県の若年層方言について「いわゆる形容詞の無活用化の傾向が著しい」⁶⁾とある。この無活用化という表現は、活用形が統合されて従来の活用が無くなっていく現象であることは理解しやすいが、活用そのものが無くなるのではない。また、無活用では一つの活用形を語幹とする活用の説明には不適切である。日野（1986）では、自立的な語形である終止形を「単語」と見ることによって単語中心活用⁷⁾と表現している。単語という概念は通常、活用語尾を含めて単語と認定するものである。つまり、単語中心活用とすると、単語という概念と活用という概念が矛盾することになる。大西（1997）は、take-katta（高かった）・take-ne（高くない）などの形を挿け替え型⁸⁾と表現しているが、これは現象を説明したもので活用の種類を表現したものではない。そこで、本稿では形容詞の終止形を語幹として活用するものを形容詞型終止一段活用と表現した。また、従来の活用から形容詞型終止一段活用へと変化してきている過程を、形容詞の終止一段活用化（以後一段化）と表現する。

3. 終止一段活用の全国分布

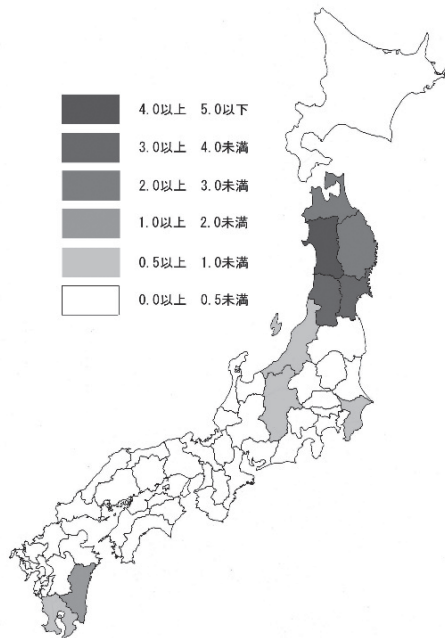


Figure 1 終止一段活用の分布 県単位

Figure 1は、国立国語研究所編（1994）『方言文法全国地図』第3集の「図137高くない（否定形）」「図138高くて（～て形）」「図139高くなる（～なる形）」「図141高かった（過去形）」「図143高ければ（假定形1）」から作成したものである（共通語において終止連体形が出現する「図136高い（物）（連体形）」「図142高いだろう（推量形）」と「図144高いなら（假定形2）」は外した）。takai およびその音韻変化した語形（takee/tagεε など）が出現した場合に1p(point)とし、地域ごとの平均値を合計した。ただし、基本的に終止連体形が出現しない質問項目でも、終止連体形が予想される回答がある。たとえば、「高くて」においてtakee-kara（高いから）、takee-node（高いので）のような回答例である。このような回答は母数から外して算出した。

5つの項目（活用形）の合計なので0p以上5p以下の値をとるが、東北地方と九州南東部でABA分布をなしていることが確認できる。最高値は秋田県の4.48pである。秋田県を中心として山形県・宮城県では一段化がほぼ完成している。宮崎県と鹿児島県東部でも一段活発が進行しており、宮崎県は1.92pで、岩手県2.26p、青森県2.09pと近い。Figure 2は、Figure 1をさらに細分化（各県5から7地点ごとに分割して集計）したもので、一段化が特に進行している地域がわかる。特に進行している地域が発生源と推測できる。秋田県から宮城県北西部にかけての地域の数値がもっとも高く、東北ではこの地域が伝播の中心地であると考えられる。九州では宮崎県中央部の2.71pがもっとも高く、南部2.03p、北部1.07pとなった。鹿児島県南東部（大隅半島）1.43p、北東部1.31pとなっている。九州では宮崎県中央部から周辺地域に伝播していったと考えられる。

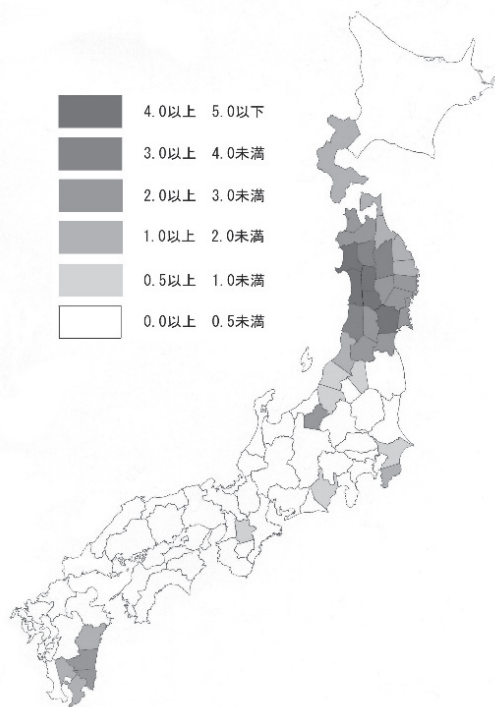


Figure 2 終止一段活用の分布 細分化

Figure 3から Figure 7は各活用形に関する細分化（各県5から7地点ごとに分割）した地域の集計である。0 p 以上 1 p 以下の値をとり、0.2 p 刻みの5段階で表した。秋田県はすべての活用形が終止形接続となっているが、他県では活用形ごとに異なる。活用形ごとに分析する。

Figure 3は過去形（高かった）の分布図である。秋田県・山形県・宮城県・宮崎県中・南部・鹿児島県東部では数値が0.8p 以上でほぼ終止形接続となっている。

Figure 4は假定形（高ければ）の分布図である。青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県北西部・宮崎県中央部で0.8 p 以上の値になり、ほぼ終止形接続となっている。

Figure 5はテ形（高くて）の分布図である（「この品物は、値段が高くて質も良い」の「高くて」）。秋田県や宮城県東部などでは、ほぼ終止形接続となっており、山形県や青森県西部では半数以上が終止形接続となっている。宮崎県や鹿児島県東部では一段化は進んでいない。

Figure 6はナル形（高くなる）の分布図である（「物の値段がだんだん高くなる」の「高くなる」）。秋田県と宮城県東部は、0.8p 以上でほぼ終止形接続となっており、山形県ではやや優勢となっているが、青森県では劣勢である。九州ではこの活用形で一段化は進んでいない。

Figure 7は否定形（高くない）の分布図である（「この品物の値段はあまり高くない」の「高くない」）。秋田県では優勢となっているが、その他の地域ではほとんど使用されていない。奈良県の中央部で takainai の使用例が数例ある。

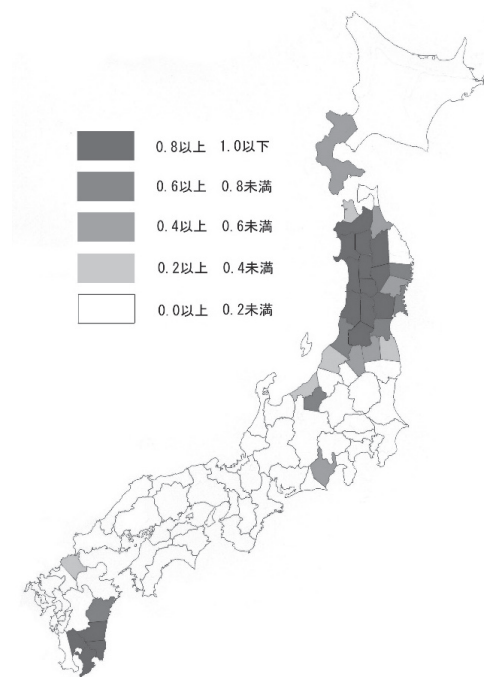


Figure 3 過去形「高かった」(細分化)

形容詞終止形一段活用の発生要因

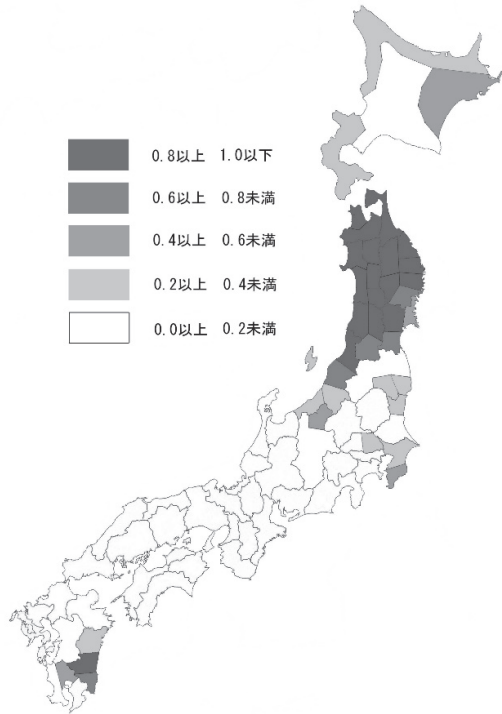


Figure 4 仮定形「高ければ」(細分化)

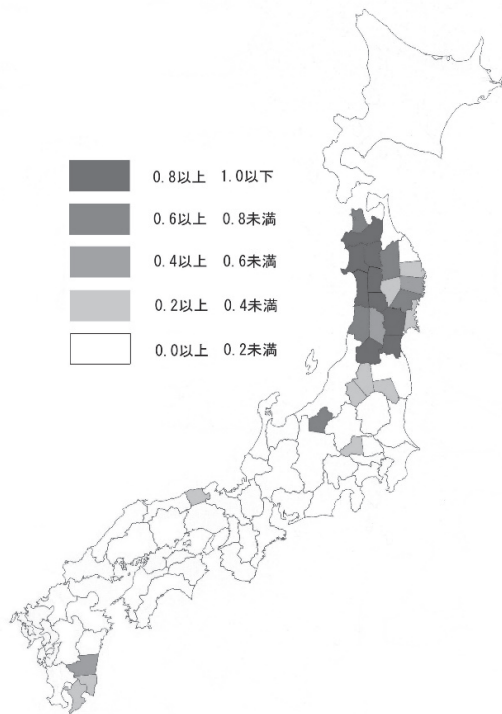


Figure 5 テ形「高くて」(細分化)

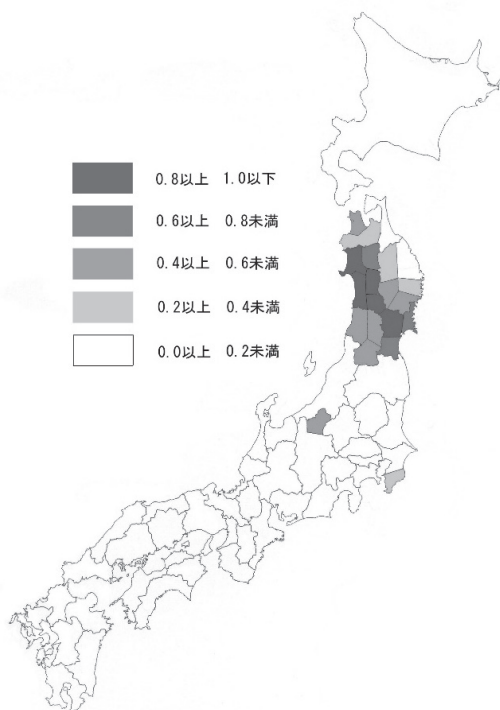


Figure 6 ナル形「高くなる」(細分化)

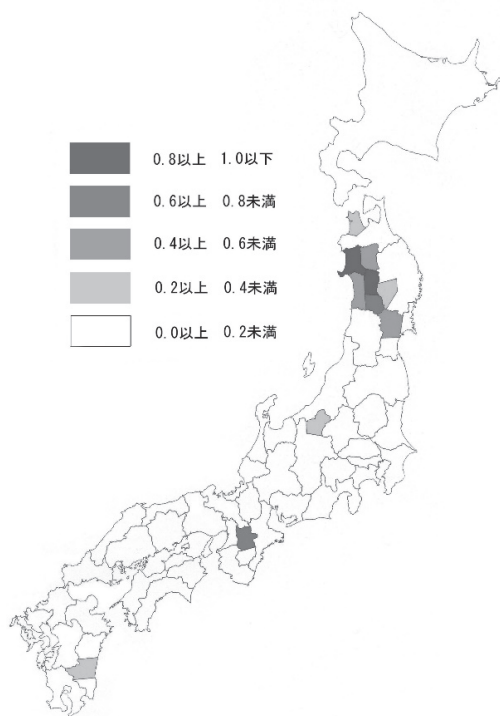


Figure 7 否定形「高くない」(細分化)

Figure 3から Figure 7において、秋田県はすべての活用形が終止形接続となっているが、他県では活用形ごとに異なる。九州でもっとも一段化が進行しているのが過去形であり、東北でもっとも進行しているのが仮定形である。地域的な状況から、一段化は次のように進化したと考えられる。

東北地方： 仮定形 → 過去形 → テ形 → ナル形 → 否定形
 九州南部： 過去形 → 仮定形 → テ形 → 否定形 → ナル形

4. 終止形接続の九州分布

Figure 8から Figure 12までは、国立国語研究所編（1994）の図137、図138、図139、図141、図143から作成したもので、九州での各活用形の語幹を表している。●もしくは▲が終止形接続の地域である。凡例の/Q/は促音、/R/は長音で表現した。*は「高いので（「高くて」の項目）」のように終止形の回答が予想されるものである。

Figure 8（過去形「高かった」）は宮崎県全域と鹿児島県東部のほぼすべての回答が終止形接続であり、Figure 9（仮定形「高かった」）では、過去形に比べて宮崎県中・南部と鹿児島県東部だけに使用域が狭まっている。

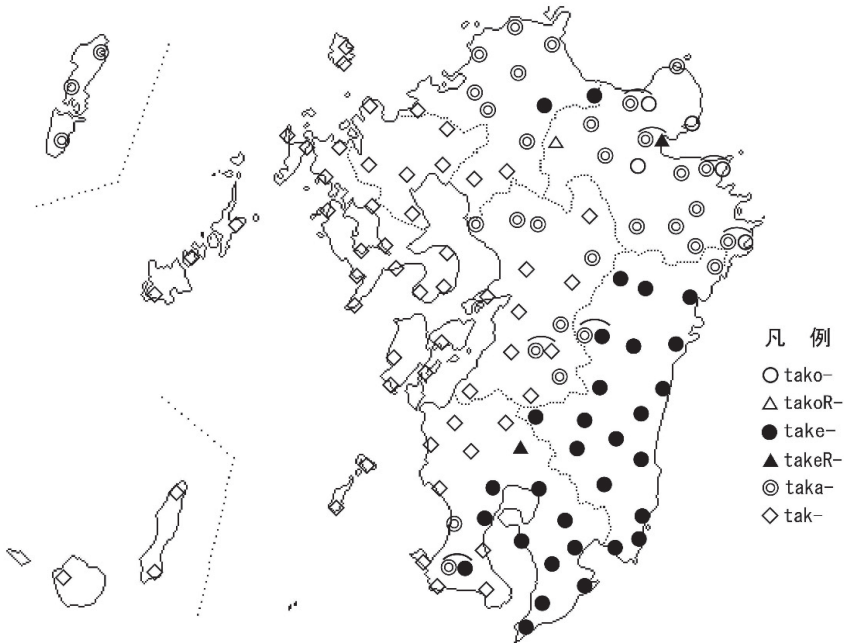


Figure 8 過去形「高かった」(九州)

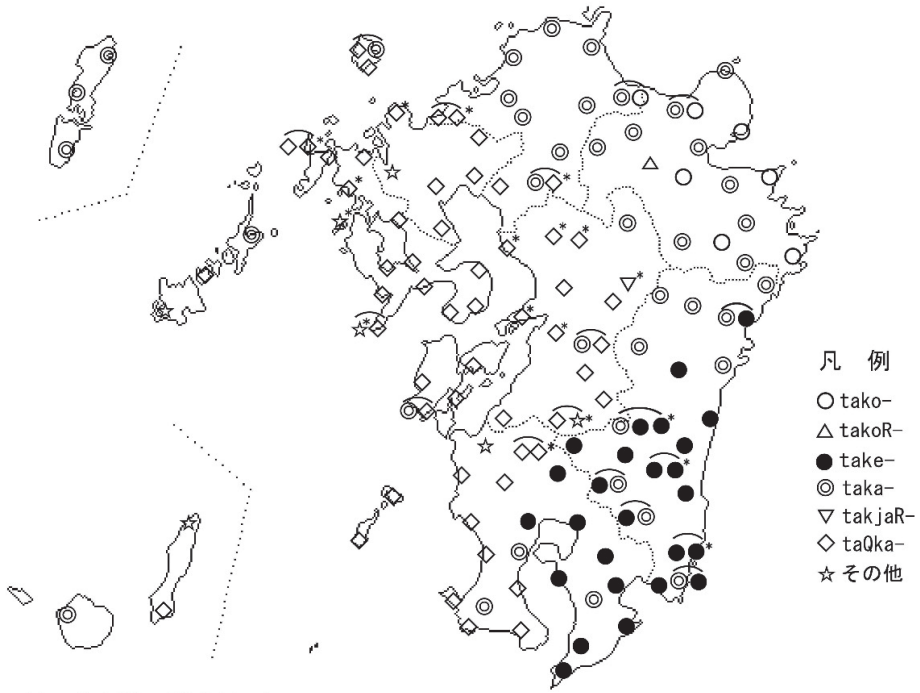


Figure 9 仮定形「高ければ」(九州)

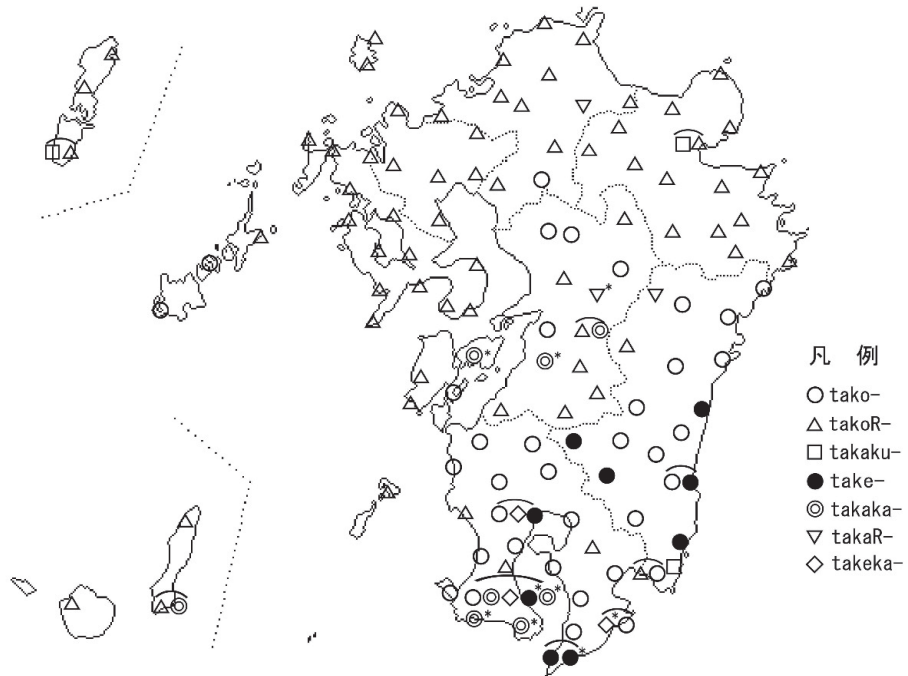


Figure 10 テ形「高くて」(九州)

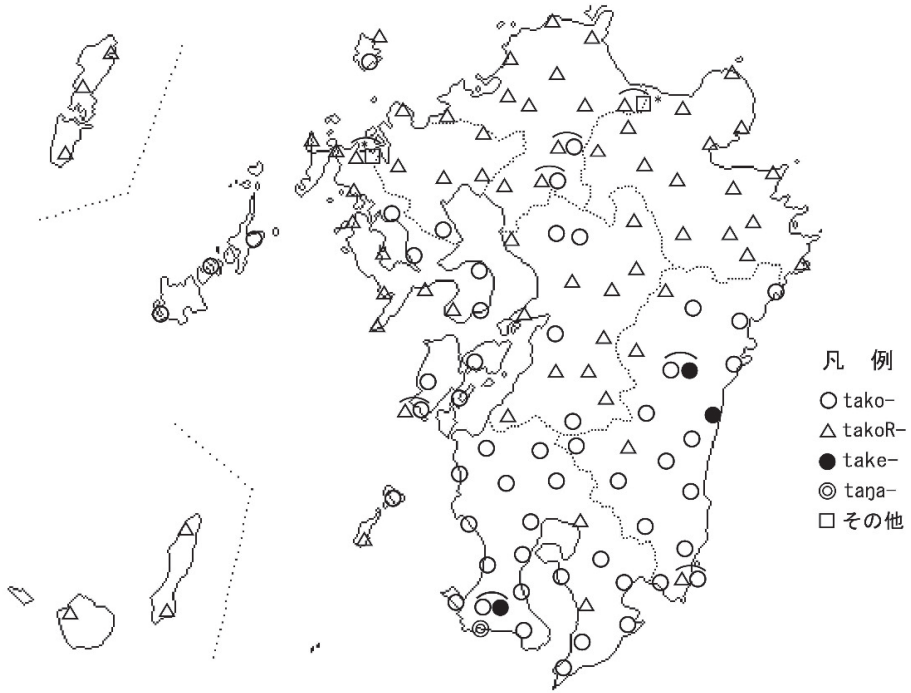


Figure 11 ナル形「高くなる」(九州)

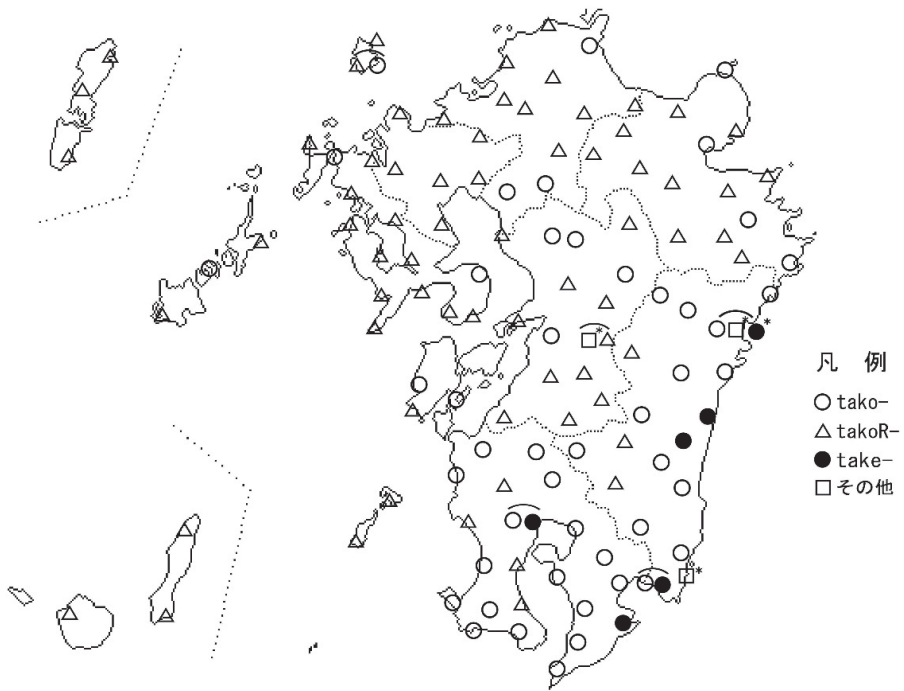


Figure 12 否定形「高くない」(九州)

Figure 10 (テ形「高くて」)では、終止形接続の地域は假定形に近いが／tako-／という連用形接続が優勢である。この地域はウ音便形が強いいため、新しい変化は起きにくいと考えられる。Figure 11 (ナル形「高くなる」)で終止形接続は宮崎県都農町・南郷村、鹿児島県川辺町に確認できるだけであり、Figure 12 (否定形「高くない」)では九州南東部の海岸線沿いに数地点と鹿児島県蒲生町に確認できるだけである。宮崎県中・南部を中心に「過去形 → 假定形 → テ形 → 否定形 → ナル形」と、終止形接続が進行している。

Table 1は九州方言学会 (1969)で各県の代表的な活用として記述されているものをまとめたものである。ここから、宮崎県においては「良い」に関して一段化が完成しており、「うれしい」ではナル形とテ形が連用形接続となっている。

Table 1 「よい」「うれしい」の方言形 (九州)

	よ い	よい(人)	よく(なる)	よければ	よかった	よくて
福岡県	ヨカ エー	ヨカ エー	ヨー	ヨカリヤ ヨケリヤ	ヨカッタ	ヨーシテ
佐賀県	ヨカ	ヨカ	ヨー ユー	ヨカギー	ヨカッタ	ヨーシテ ユーシテ
長崎県	ヨカ	ヨカ	ヨー	ヨカレバ ヨカナラ	ヨカッタ	ユーシテ
熊本県	ヨカ エー	ヨカ エー	ヨー ユー	ヨカナラ ヨカレバ	ヨカッタ	ヨーシテ
鹿児島県	ヨカ エ	ヨカ エ	ユ	ヨカヤ ヨカレバ	ヨカッタ	ユシテ
宮崎県	イー	イー ヨカ	イー ユ	イーケリヤ	イカッタ	イーシテ
大分県	イー	イー	ユー	ヨケリヤー ヨカリヤ	ヨカッタ	ユージ

	うれしい	うれしい(人)	うれしく(なる)	うれしければ	うれしかった	うれしくて
福岡県	ウレシカ ウレシー	ウレシカ ウレシー	ウレシュー	ウレシカリヤ ウレシケリヤ	ウレシカッタ	ウレシューシテ
佐賀県	ウレシカ	ウレシカ	ウレシュー	ウレシカギー	ウレシカッタ	ウレシューシテ
長崎県	ウレシカ	ウレシカ	ウレシュー	ウレシカレバ ウレシカナラ	ウレシカッタ	ウレシューシテ
熊本県	ウレシカ	ウレシカ	ウレシュー	ウレシカナラ	ウレシカッタ	ウレシューシテ
鹿児島県	ウレシカ ウレシ	ウレシカ ウレシ	ウレス ウレシ	ウレシカヤ ウレシカレバ	ウレシカッタ	ウレスシテ
宮崎県	ウレシー	ウレシー	ウレシユ (ウレシ)	ウレシケリヤ	ウレシカッタ	ウレシユシテ (ウレシシテ)
大分県	ウレシー	ウレシー	ウレシュー	ウレシケリヤー ウレシカリヤ	ウレシカッタ	ウレシュージ

九州方言学会 (1969) より作成

5. 方言談話資料から

日本放送協会編 (1966)⁹⁾から形容詞 (ク活用) が終止形接続している使用例を抽出すると Table 2 のようになる。現在の地名と異なっている調査地もあるので Figure 13 として談話収録地を提示する。分母がその形容詞 (ク活用) の出現数で、分子が終止連体形の出現数、そして括弧内は % である。

宮崎県日南市では過去形 9 例 (9/10)、假定形 3 例 (3/3) あり、この地域では過去形、假定形から一段化 (終止形接続) が発生したことが、1890年~1900年頃に生まれた話者の談話資料からも確認できる。従って、この話者たちの言語形成期である1900年初頭頃

には、この現象は発生していたと推測できる。

鹿児島市では過去形で3例(3/6)、宮崎県東臼杵郡南方村(現延岡市)では過去形で2例(2/6)確認できるが、現在使用が確認できる大分県や福岡県東部での用例は確認できない。談話資料からも、九州では宮崎県中・南部から終止一段活用が発生したことが確認できる。

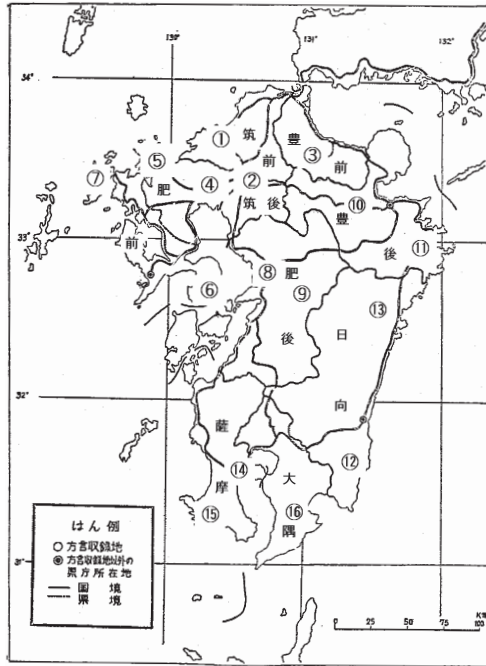


Figure 13 談話収録地

Table 2 日本放送協会(1966)における形容詞一段活用の用例数

		否定形	推量形 (-だろう)	推量形2 (-かろう)	連用形 (用言)	過去形 (-かった)	終止形	連体形	假定形1 (-ならば)	假定形2 (-ければ)
福岡県	福岡市博多①	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/2 (0%)	0/7 (0%)	0/1 (0%)	4/4 (100%)	2/4 (50%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
	三井群善道寺町②	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/2 (0%)	0/8 (0%)	0/6 (0%)	3/6 (50%)	15/17 (88.2%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
	築上郡岩室村鳥井畑③	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/3 (0%)	0/12 (0%)	0/9 (0%)	16/16 (100& 9)	15/15 (100%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
佐賀県	佐賀郡久保泉村川久保④	0/1 (0%)	1/1 (100%)	0/5 (0%)	0/13 (0%)	0/3 (0%)	5/19 (26.3%)	0/10 (0%)	0/1 (0%)	0/0 (0%)
	東松浦郡有浦村⑤	0/1 (0%)	0/0 (0%)	0/4 (0%)	0/11 (0%)	0/19 (0%)	0/23 (0%)	1/17 (5.9%)	0/1 (0%)	0/0 (0%)
長崎県	南高来郡有家町⑥	0/2 (0%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/9 (0%)	0/3 (0%)	0/2 (0%)	4/16 (25%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
	北松浦郡中野村⑦	0/2 (0%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)	0/9 (0%)	0/20 (0%)	1/8 (12.5%)	5/27 (18.5%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
熊本県	熊本市中唐人町⑧	0/4 (0%)	0/0 (0%)	0/2 (0%)	0/19 (0%)	0/8 (0%)	0/7 (0%)	4/11 (36.4%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
	上益城郡浜町⑨	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/2 (0%)	0/9 (0%)	0/4 (0%)	1/13 (7.7%)	7/16 (43.8%)	0/0 (0%)	0/2 (0%)
大分県	大分郡西庄内村⑩	0/1 (0%)	0/0 (0%)	0/2 (0%)	0/11 (0%)	0/2 (0%)	16/16 (100%)	24/24 (100%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
	南海部郡上野村⑪	0/5 (0%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)	0/13 (0%)	0/4 (0%)	29/29 (100%)	20/20 (100%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)
宮崎県	日南市飢肥町⑫	0/2 (0%)	0/0 (0%)	1/1 (100%)	0/19 (0%)	9/10 (90%)	15/15 (100%)	10/10 (100%)	0/0 (0%)	3/3 (100%)
	東臼杵郡南方町⑬	0/2 (0%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/8 (0%)	2/6 (33.3%)	15/15 (100%)	14/14 (100%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)
鹿児島県	鹿児島市⑭	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/14 (0%)	3/6 (50%)	2/9 (22.2%)	2/12 (16.7%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)
	枕崎市鹿籠⑮	0/1 (0%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/19 (0%)	0/2 (0%)	3/7 (42.9%)	7/22 (31.8%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)
	肝属郡高山町麓⑯	0/0 (0%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)	0/10 (0%)	0/0 (0%)	8/14 (57.1%)	5/10 (50%)	0/0 (0%)	0/0 (0%)

宮崎県日南市飢肥町の談話で、形容詞が終止形接続している使用例は次の通りである。話者は1902年生 (m) と1900年生 (f) の二人である。

(1) 過去形

1. m ヨユーガ ネカッタームンナ (余裕がなかったものね)
2. m イエレカッタームンナー (大変だったものねえ)
3. m ナカナカ ヌキカッター (たいそう暑かったねえ)
4. f ヌキカッター (暑かったねえ)
5. f ハイエカッターナ ソラ (早かったですねそれは)
6. f イェロ ハエカッター (ずいぶん早かったねえ)
7. f ヌキカッターロガー (暑かったでしょうね)
8. m ヌキシ イエレカッター (暑いしたいへんだった)
9. m キョー イエレカッター (きょうはたいへんだったよ)

(2) 仮定形

10. m イェロ オイケリヤ ネド (そう多くはないよ)
11. m チットデン イケリヤ モッチキネー (少しでもよければ持って行きなさい)
12. m ジューニジノコロジャ ネケリヤ (12時のころでない)

Table 3 宮崎市方言の形容詞活用

	高い	良い	ない	静か	元気	きれい	濃い
終止形	タケ(a,b,c,d,e,f)	イ(→)(a,b,c,d,e,f)	ネ(→)(a,b,c,d,e,f)	シズカジャ(e) シズカヤ(b) シズカナ(a,b,d,f) シズカド(c)	ゲンキナ(ワ・ド)(a,b,f) ゲンキヤ(a,d) ゲンキ(c)	キレージャ(e)	コイ(→)(a,b,c,d,e,f)
推量形 a	タケジャロ(c,d) タケヤロ(a,b,f) タケツチャネカ (f) タケツチャネドカ イネ(e) タケツチュハナツ シヤガ(e)	イツチャネ(e) イツチャネジャロ カ(e) イジャロ(a,b,d) イヤロ(b,c) イコタネ(b)	ネツチャネ(c,e) ネジャロ(b,f) ネ(→)ヤロ(a,d) ネツチャガ(d)	シズカヤロ(e) シズカジャネジャロ(e) シズカジャロ(a,b) シズカジャワ(a) シズカジャネ(a) シズカナツチャガ(d) シズカナトキモトツチャガ(d) シズカジャガ(e)	ゲンキナジャロ(f) ゲンキナツジャロ(a) ゲンキジャロ(a,b) ゲンキナツチャロ(d) ゲンキナツチャネ(c)	キレージャロ(d,e) キレーヤツチャネ (c)	コイツチャネ(b,c,d,e) コイジャロ(a,f) コイヤロ(b)
推量形 b (念押し)	タケジャロ(c,d,e) タケジャネ(b) タケガ(a)	イジャロ(a,c,d,e) イド(b) イカッターロ(f)	ネガネ(b,e) ネジャロ(b) ネージャネ(f) ネツチャガ(b,d) ナイト(d) ネ(→)ヤロ(a,c) ネ(→)ド(a)	シズカジャ(e) シズカジャロ(b,d) シズカヤロ(a,c)	ゲンキナド(f) ゲンキナヤロ(b) ゲンキナツジャロ(a,d) ゲンキナツチャロ(d) ゲンキジャロ(a,c)	キレージャロー(e) キレーヤロー(e)	コイヤロ(e) コイド(f) コイジャロ(a,c,d) コイヤロ(d) コイガネ(b)
テ形	タコツシエ(a,b,f) タケデ(f) タケツシエ(b,d) タケカッタカラ (c)	イーツシエ(d,e) イ(→)シテ (a,b,c,f) イカッターカイ(c)	ネ(→)シテ (a,b,c,e,f) ネツシエ(e) ネカッターカイ(d)	シズカデ(a,b,c,d,e,f) シズカナシテ(f)	ゲンキデ(a,b,c) ゲンキナシテ(d)	キレーデ(e)	コクテ(e) コイカラ(f) コイシテ(a) コユシテ(a) コイツシエ(b,d) コイクテ(c)
連用形	タコナル (b,c,d,e,f) タケナル(a)	イーナル(c,e,f) ユ(→)ナル(a,b,d)	ネ(→)ナル (a,b,c,d,e,f)	シズカンナル(a,b,c,d,e,f) シズケナル(a)	ゲンキニナル(f) ゲンキンナル(a,b,c,d)	キレーナル(e)	コイナル(c,d,e,f) コユナル(b,f) コナル(a)
過去形 (~カッタ)	タケカッタ (a,b,c,d,e,f)	イ(→)カッタ (a,b,c,d,e,f)	ネカッタ(a,b,c,d,e,f)	シズカヤッタ(c,e) シズカヤッタ(b,d) シズカナカッタ(a,d)	ゲンキヤッタ(a,d) ゲンキヤッタ(c) ゲンキナカッタ (a,b,d,f)	キレーヤッタ(e)	コイカッタ (a,b,c,d,e,f)
連体形	タケ(a,b,c,d,e,f)	イー(a,b,c,d,e,f) ヨカ(d)	ネ(b,c,d,e,f)	シズカナ(a,b,c,d,e,f)	ゲンキナ(a,b,c,d,f)	キレーナ(e)	コユイ(e) コイ(→)(a,b,c,d,f)
仮定形 (~ケレバ)	タケケリヤ (a,b,d,e,f) タケカイ(c)	イケリヤ(→) (a,b,c,d,e,f)	ネケリヤ(a,b,c,d,e,f) ネカイ(c)	シズカナケリヤ(→)(a,b,d) シズカヤッタラ(c,e) シズカジャッタラ(a,d) シズケナラ(a)	ゲンキナケリヤ(→)(f) ゲンキナケレバ(b) ゲンキナケリヤ(→) (a,c,d) ゲンキナラ(c)	キレーヤッタラ (e)	コイケレバ(e) コイケリヤ(b,c,a,e,f) コユケリヤ(a)
当然 (~ハズ)	タケハズ(a,b,d,e) タケツチャネヤロ カ(e) タケツチャネツカ (e) タケジャロ(c)	イーハズ(a,b,d,e) イージャロー(c) イーチャネーヤロ カ(e)	ネ(→)ハズ (a,b,d,e,f) ネージャロ(b) ネツチャネ(c)	シズカナハズ(a,b,c,d,e) シズカジャナイツチャロカ(e) シズカナド(→)(b) シズカナツチャネ(c)	ゲンキナハズ (a,b,c,d,e,f) ゲンキヤネツチャロ カ(e) ゲンキナジャロ(f) ゲンキナツチャネ(b)	キレーナハズ(e)	コイハズ(a,b,c,d,e)
否定形	タコワネ(e) タカクネ(f) タコワネ(b) タケネ(a,d) タコネ(a,c) タケナイ(a)	ヨクネ(d,e) ユーネ(a,b,e) ユワネ(b) イーネ(b,c,d) イーツチャネ(c)		シズカジャネ(a,b,c,e) シズカナコタネ(d)	ゲンキヤネ(a,b) ゲンキヤネ(a,c)	キレーヤネ(e)	コクナイ(e) コユクネ(b,f) コイネ(c,d) コユネ(a) コユワネ(a) コイワネ(a)

a:57m (宮崎市大塚町) b:66m c:67m d:68m e:70m f:71f (以上宮崎市源藤町) 数値は2007年 8月時点の年齢

(3) 推量形

14. m ンニャ ハイェカロカ (いや 早いものか)

下記の用例15は連用形が一段化しているようにもみえるが、このオーキーナッタは形容動詞オーキニナルからの変化で(補註1)、一段活用ではない。用例16は助動詞ナイが一段化した例である。Table 3は2007年に宮崎市源藤町および大塚町で行った調査(補註2)であるが、「良い」「無い」の一段化は既に完成している。Table 3からもわかるが、宮崎県方言では長音が短音化する。「良い」「無い」の2音節形容詞において終止形語尾が短音化すると1音節になり、単語と語幹の区別が非常に曖昧になる。つまり「良い」「無い」の2音節形容詞において最初に一段化が発生したと推測できる。

15. m マエントヨナ オーキー ナッタ オラン (以前のような大きくなるのはない)

16. f パサンノナー ユネカッタゲナガー (ばあさんがね よくなかったのですが)

6. 考察：発生のメカニズム

Figure 1から Figure 7において終止一段活用が観察できる地域は、形容詞語尾の連母音が融合し、さらにその短音化するシラビーム方言域(柴田1962)¹⁰であり、このことは大西(1997)においても指摘されている。九州方言においては、シラビーム方言域でも、形容詞語尾の融合が起きないカ語尾地域では一段化は生じにくい(補註3)。たとえば鹿児島方言でも一段化が起きているのはイ語尾地域だけで、カ語尾地域ではイ語尾地域との隣接地域を除いて起きていない。当然、東北地方もイ語尾である。これらの共通点から、一段化発生のメカニズムを考察する。

形容詞の終止一段活用が発生した大きな要因は、形容詞終止形語尾の短音化であると考えられる。たとえば「高い」では、終止形(終止連体形)が /take/ となると、語幹 /taka-/ と終止形が同じ2音節となり、独立性の強い終止形と語幹との区別が希薄になる。語幹の独立性が強くなると、活用語尾は語幹との結びつきよりも後接する助動詞との結びつきの方が強くなる(補註4)。そして、記憶の合理化が働き活用形の統合化が起こる。たとえば宮崎方言では、まず過去形が終止形と統合した。過去形タカカッタがタケカッタとなると次のような関係になる。

taka	kaQ	ta	take	kaQ	ta
形容詞 (語幹・語尾) + 助動詞			→	形容詞 (語幹) + 助動詞 (語尾・助動詞)	

/-kaQta/は語尾的な助動詞として独立性が強いものとなっている。岩本(1964)¹¹では、仮定形語尾のケリヤが、日向方言においては活用語尾ではなく、一種の辞になっていると指摘している。九州方言学会(1969)では「行かなかった」に対応する「行カンカッタ」が九州では宮崎県南部で発生していることが確認できる。これなども/-kaQta/が終止形接続するという方言的特徴が既にあったことが関係していると思われる。

高い (ク活用)	take	take-kaQta	teke-kerya
うれしい (シク活用)	uresi	uresi-kaQta	uresi-kerya

／take／が語幹になることで、以下のように形容詞シク活用との類推変化が起きていると考えられ、これは、 $a:b=c:d$ というパウル・ヘルマンの比例式¹²⁾を用いると「uresi:take = uresi-kaQta:take-kaQta = uresi-kerya:take-kerya」の関係式が成り立つことになる。「高い」と「うれしい」の活用の違いは語幹（終止形）末尾の母音だけになる。この場合、動詞の例に従えば、「高い」は語幹末尾が e となる形容詞型下一段活用、「うれしい」は語幹末尾が i となる形容詞型上一段活用と表現することができる。従来のク活用は、「赤い・高い」の形容詞型下一段活用、「黒い・良い・濃い・悪い」などの形容詞型上一段活用に分かれることになる。そして、従来のシク活用は上一段活用に統合されることになる。

形容詞の終止形語尾の短音化が語幹の独立性を強くして、語尾は接続する過去の助詞や助動詞との結びつきが強くなり東北では tage(ε)ba (仮定形)、九州では takekaQta (過去形)が発生する。ある活用形で終止形接続が発生すると、他の活用形にも類推変化で派生していくが、その場合、シク活用との類推による合理化が働くことで強化されたと考えることができる。

本稿では、終止形接続に関する現象だけを扱ったが、大分県には連用形で一段活用化していると考えられる例（タコカッタ）もある。今後は、連用形接続の一段活用化についても考察する必要がある。

また、宮崎市方言では形容動詞（ナ形容詞）においても一段活用化が観察できる（Table 3）。たとえば「静か」ではシズカナ（静かだ）・シズカナカッタ（静かだった）・シズカナケリヤ（静かなら）のようになる（早野・田中2009）¹³⁾。この現象についても詳しく分析する必要がある。

【補註】

1. 第25回九州方言研究会の発表時に木部暢子氏から指摘を受けた。
2. 宮崎市源藤町・大塚町の現地調査は田中利砂子氏が中心で行った。
3. 宮崎県小林市では「よい」はカ語尾の「ヨカ」となるが、この語においても一段化が観察できた。ユーシテ（テ形）がヨカシテ、ユーナル（連用形）がヨカナルに変化してきている。これは、ヨカを語幹とした一段活用である。この現象は、筆者が2008年3月に高年層、活躍層話者4名に対して行った現地調査で確認できた。小林市はカ語尾とイ語尾の境界線にあるが、同じく境界線にある鹿児島県蒲生町と川辺町ではテ形にタケカッセ（カ語尾とイ語尾のコンタミネーション）が観察できる。
4. 活用語尾が接続する助詞や助動詞と一体化する現象は首都圏でも観察できる。たとえば、首都圏では変クテ（変で）、変クナイ（変ではない）、キレイクナイ（きれいではない）などの新方言形が発生してきている（早野1996）¹⁴⁾。これなどは、活用語尾が語幹よりも次に続く助詞や助動詞と結びついているために起きる現象である。

【参考文献】

1. J・ロドリゲス（土井忠生訳注）（1955）『日本大文典』三省堂 p.610
2. 糸井寛一（1969）「大分」『九州方言の基礎的研究』風間書房
3. 日野資純（1986）『日本の方言学』東京堂
4. 国立国語研究所編（1994）『方言文法全国地図 第3集』大蔵省印刷局

5. 九州方言学会 (1969) 『九州方言の基礎的研究』 風間書房
6. 参考文献 2 p.260
7. 参考文献 3 p.299
8. 大西拓一郎 (1997) 「活用の整合化—方言における形容詞の「無活用化」、形容動詞のダナ活用の交替などをめぐる問題—」 『日本語の歴史地理構造』 明治書院 p.516
9. 日本放送協会編 (1966) 『全国方言資料 第6巻九州編』 日本放送協会
10. 柴田武 (1962) 「音韻」 『方言学概説』 武蔵野書院
11. 岩本実 (1964) 「日向の高千穂方言」 『宮崎大学学芸学部紀要』 17 pp.15-31
12. パウル・ヘルマン、福本喜之助訳 (1993) 『新装版 言語史言論』 講談社学術文庫
13. 早野慎吾 田中利砂子 (2009) 「元気だったのに元気なかった？」 『九州方言の底力』 大修館 pp.148-150
14. 早野慎吾 (1996) 『首都圏の言語生態』 おうふう pp.86-88

【付記】

本稿は第25回九州方言研究会 (2008)、第86回日本方言研究会 (2008) で発表した内容に、その後に行った調査の結果を加えてまとめたものである。発表時は調査参加者と連名で行ったが、本稿では、執筆に関わっていないために外した。

【要旨】

九州東部方言はイ語尾地域である。そのイ語尾地域である宮崎県を中心に「無活用化」(糸井1969)、「単語中心活用化」(日野1986)と呼ばれる現象が観察できる。これは形容詞の終止形を語幹として活用するものである。例えば「高い」は、take (高い)・take-katta (高かった)・take-ne (高くない)・take-naru (高くなる)、take-kerya (高ければ)のようになる。本研究では、この現象を形容詞型終止一段活用と表現する。この現象は東北地方と九州南東部(特に宮崎県中・南部および鹿児島県東部)で主に観察できる現象で、ABAの分布をなしている。東北方言と九州南東部には、シラビーム方言やイ語尾などが共通している。形容詞型終止一段活用発生メカニズムについて、先行研究および宮崎県宮崎市で行った調査をもとに分析した結果、その主な発生要因は終止形末尾の短音化により、単語と語幹の区別が曖昧化することであると考えられた。

キーワード：形容詞終止形一段活用 短音化 イ語尾 ABA 分布

Received : September, 20, 2021

Accepted : November, 2, 2021

